

筑波大学 社会・国際学群 国際総合学類
卒業論文

日本人バックパッカーのアイデンティティと「自由」

2012 年 1 月

氏 名：高村 汐理

学籍番号：200710378

指導教員：関根 久雄

目 次

第1章 序論	1
1. 問題意識・問題設定	1
2. 研究方法	2
第2章 日本のバックパッキング文化	4
1. バックパッキングとは	4
(1)バックパッキングの定義	4
(2)バックパッキングの特徴	5
2. 日本人と海外旅行	9
(1)日本人の旅と海外渡航の自由化	10
(2)パッケージツアーの登場と発展	11
(3)バックパッキングの変遷	13
3. 日本におけるバックパッキング文化	16
第3章 日本人バックパッカーと「自由」	19
1. バックパッカーが描くパッケージツアーとバックパッキング	19
(1)パッケージツアーのイメージ	19
(2)バックパッキング像	22
(3)「旅」と「旅行」	24
2. バックパッキングと「自由」	25
(1)バックパッキングの魅力	25
(2)「自由」とはなにか	32
3. 「自由」による「旅」と「旅行」の認識	35
(1)パッケージツアーとバックパッキングにおける「自由」	35
(2)「自由」の身体化	37
(3)「自由」の役割	38
第4章 結論	40

注	43
参考文献	46
Summary	49
謝辞	51

第1章 序論

1. 問題意識・問題設定

日本の海外旅行者数は、1964年の海外渡航自由化に伴う第一次海外旅行ブームや1970年のジャンボジェット機導入による第二次海外旅行ブーム、1985年以降の円高進行や1987年に運輸省が策定した「海外旅行倍增計画（Ten Million Program）」による第三次海外旅行ブームなどを経て、飛躍的な増加を遂げた[北川 1998:151]。1960年代には50万人足らずであった旅行者の数は、2009年には40年間で約30倍の1,545万人に達し[国土交通省観光庁 2010]、限られた富裕層のみのレジャーであった海外旅行は、多くの人々が気軽に選択できるレジャーへと変化した。

この海外旅行の発展と大衆化の一翼を担ったのは、旅行会社が旅行行程や宿泊所などを手配し旅行者に提供する、パッケージツアーという旅行のスタイルである。日本の海外旅行におけるパッケージツアーは、海外渡航の自由化と共に1964年に登場した「ジャルパック」を手はじめに数多くの商品が登場し、日本の海外旅行スタイルの主流としてその発展を支えてきた。しかし、海外渡航の自由化や円高が進み、その敷居が低くなるとともに、パッケージツアーによる添乗員付き団体旅行ではなく、自由度の高い個人旅行への需要が増加した。そのような中で、パッケージツアーへのアンチテーゼとして登場したのが、バックパッキングという旅行のスタイルである。

それは、日本では1980年代に主に若者の間で広まった。この旅行のスタイルは、旅行行程における諸手配を全て自分自身で行い、低予算で、比較的長期間にわたり旅を続けるという特徴を持つ。そして、このようなバックパッキングを行う旅行者を総称して「バックパッカー」と呼ぶ。バックパッキングはパッケージツアーと比較してストイックな側面を持つ。いつ着くのか分からない長距離バスに揺られ、重いザックを背負って宿を探し歩かねばならない。しかも、たどり着いた街に適当な宿があるかどうか分からない。出会う人々、訪れる場所に対して、安全や安心は一切保証されておらず、常に注意を払っていなければ危険に巻き込まれるおそれもある。しかし、その責任は旅行会社ではなく常に自分にあり、どのような事件が発生しても全てを受け入れ、自分自身で対処して先に移動するしかない。それでも、バックパッカーは、高価な団体旅行のパッケージツアーでは味わえない魅力を求めて、あえてバックパッ

キングを選択し、世界を旅する。

1980年代後半に入ると、安価で、しかも比較的自由度の高いスケルトンツアーが登場した。これは、航空券と宿泊所のみがついたパッケージツアーであり、「フリープラン」などとも呼ばれる。スケルトンツアーは、団体行動という規制がなく、また全てを自分で手配するよりも安価となることも多く、現在では海外旅行の主流のスタイルとなっている。このような個人旅行用のパッケージツアーの登場は、日本人の海外旅行におけるバックパッキングの意味を変化させた。「自由な旅のスタイルは魅力に感じても、わざわざバックパッカーの道を選ぶ必要を感じられない。安心で、好みに合わせて選べるパッケージツアーで充分」[武中 2001:10]と考えるようになり、団体旅行への唯一のアンチテーゼとしてのバックパッキングの意味は減退していったのである。しかしながら、このように旅行のスタイルにおける選択肢が広がる現在においても、バックパッキングを選択し、世界を旅する旅人は数多く存在する。現在の日本人バックパッカーたちは、バックパッキングに何を求め、また何が達成された時に自らがバックパッカーであるというアイデンティティを獲得できるのであるか。

筆者は2009年11月から12月にかけてインド、タイ、カンボジア、ベトナムにてバックパッキングを行い、各地で日本人バックパッカーに出会った。彼らの話を聞く中で、また2011年8月に実施したタイ・バンコク及び日本国内におけるバックパッカーへのインタビュー調査の中でよく耳にしたのは、バックパッキングの魅力とは「自由であること」という語りである。彼らは、選択肢が広がり、団体旅行や決められた行程から逃れる唯一の手段としてのバックパッキングの意味が減退する中で、依然として、一見して不自由ともとれるストイックな旅行のスタイルにこだわっている。

バックパッカーのいう「自由」とは何を意味しているのだろうか。本稿では、「自由」を切り口に、日本人バックパッカーがバックパッキングに求めているもの(こと)を考察し、現代日本におけるバックパッカーのアイデンティティを明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

文献、ウェブサイト、及び日本人バックパッカーへのインタビュー調査を元に研究を行う。文献、ウェブサイトに関しては、日本人の海外旅行に関して述べられたもの、バックパッキングやバックパッカーに関して述べられたものを主に使用し、必要に応

じて紀行文やガイドブックも参照する。インタビュー調査は、調査時点でバックパッキングを行っている現役バックパッカーと、過去にバックパッキングを行ったことのあるバックパッカー経験者の両者を対象とする。現役バックパッカーについては、2011年8月に、「バックパッカーのための安宿街としてはおそらく世界最大の規模」[新井 2000:30]と評され、多くのバックパッカーが集う、タイ・バンコクのカオサン通りにおいてインタビュー調査を実施した。また、バックパッカー経験者については、2011年7月、9月、10月に日本国内にてインタビュー調査を実施した。現役バックパッカー11名、バックパッカー経験者9名の計20名のインタビュー調査結果を用い、日本人バックパッカーの旅に対する意識の分析を試みる。

第2章では、まず、バックパッキングという旅のスタイルを定義し、日本人の海外旅行スタイルの主流であるバックツアー、及びスケルトンツアーと比較を通してその特性を明らかにする。その上で、日本の海外旅行の歴史を追いながら、バックパッキングの成立とその歩みを概観し、日本においてバックパッキングが持つ文化的な意味を考察する。

第3章では、インタビュー調査結果をもとに、現代の日本人バックパッカーがバックパッキングに求めるものは何かを明らかにする。特に、バックパッカーが考える「自由」という概念に焦点をあて、その中身を探ることで分析を行う。

第4章では、第2章、第3章の分析結果を踏まえ、現代の日本人バックパッカーが、自分自身がバックパッカーであるというアイデンティティを、何をもって獲得することができるのかを明らかにし、本稿の結論としたい。

第2章 日本のバックパッキング文化

1. バックパッキングとは

(1)バックパッキングの定義

バックパッキングという旅のスタイルは、現在では一般に知られる言葉ではあるが、その定義は曖昧である。『観光・旅行用語辞典』を編さんした北川は、その意味について「寝袋や食糧を背負って山野を徒歩旅行すること。1960年代、アメリカから発展した。現在では、自然の山野や登山活動だけでなく、世界各地を主に徒歩で旅行することのようなバックパッカー姿の自由旅行者が多い」[北川 2008:195]と述べる。この説明からも、バックパッキングという言葉の由来は、バックパックと呼ばれる大きなリュックを背負って山野を旅する旅人にあることが分かる。しかしながら、現代日本において、バックパッキングという旅行のスタイルからイメージされるものは、後者のような、世界各国を旅行する自由旅行者の側面が強い。書店には、「バックパッカー」のための旅行ガイド、紀行文が多く並ぶが、そのほとんどが目的地を海外としたバックパッキングを対象としたものである。新井は、海外におけるバックパッキングについて、「航空券のみを購入し、資本が提示する旅行形態にとらわれず、自分の意志にしたがって訪問国を周遊する旅」[新井 2001:113]という意味付けを行っている。ここにも述べられている通り、バックパッキングを定義する際に、「資本が提示する旅行形態」、すなわちパッケージツアーとの比較は切り離すことのできない要素であると考えられる。

パッケージツアーとは、「旅行業者が旅行者を募集するため、あらかじめ旅行に関する計画（旅行目的地、旅行日程、運送または宿泊サービス内容、旅行代金）を作成し、この計画に沿って実施する旅行（以下略）」[北川 2008:194]のことであり、標準旅行業約款における募集型企画旅行のことを指す。日本人の海外旅行におけるパッケージツアーの利用率は高く、日本人海外旅行者全体の62%を占め、特に海外旅行経験が3回未満の人々の場合、その利用率は77%に達する[AB-ROAD 2011:50]。この数字が示す通り、パッケージツアーは日本人の海外旅行スタイルの主流である。しかしながら、消費者からの要望の増加を受け、このパッケージツアーにもさまざまなタイプが登場している。まず一つ目は、観光やアクティビティ、交通手段、宿、食事がほと

んど組み込まれているフルパッケージツアーである。フルパッケージツアーの多くは、日本からの添乗員や現地案内のスタッフなどが存在し、出発から帰宅までの行程がほぼ全て旅行業者によって手配される。それに対し、近年増加してきたのが、航空券と宿、送迎のみが旅行業者によって手配され、現地での行動は基本的に自由行動というスケルトンツアーである。スケルトンツアーはフリープランとも呼ばれ、現在パッケージツアーの主流となっている。さらに、フルパッケージツアーとスケルトンツアーの中間として、旅行行程中に様々なオプションが選択できる、一定程度の自由時間があるパッケージツアーも存在する。以上のように、現在では多くのタイプのパッケージツアーが存在するが、手配の程度に違いはあるものの、旅行業者が旅行者の代わりに旅行に必要な手配を行うことで、旅行者の手間を省き、旅行行程や安全が一定以上保証されている点が、パッケージツアーの共通した意味である。

パッケージツアーを使わず海外旅行をする場合は、個人で旅行行程に関するあらゆる手配をしなくてはならない。これが、前述の「資本が提示する旅行形態にとらわれず」[新井 2001:113]に旅行するということを意味している。さらに、バックパッキングの意味を考える上で重要なのは、旅行行程が「柔軟」であることである。インターネットの発達により、現在では個人手配で、交通手段、宿、食事などを日本にいながらにして全て予約した状態で海外旅行に向かい、計画通りに旅行行程をこなし帰国することも可能である。しかしながら、バックパッキングの由来は寝袋、食糧を背負っての山野の徒歩旅行にあるように、宿泊、食事の場所などが確定的ではない中で旅行することに本質があり、完全に決定された行程をこなす旅行者とは区別する必要がある。そこで本稿では、パッケージツアーを使用せず、航空券のみを予約し、目的地や滞在先を柔軟に変更しながら2か所以上の都市を周遊する海外旅行のスタイルをバックパッキングと定義し、それを実施する人々を総称してバックパッカーと呼ぶことにする。

(2)バックパッキングの特徴

それでは、バックパッキングは具体的にどのような特徴をもっているのだろうか。バックパッカー向けのガイドブック及び先行研究より分析すると、以上に挙げた定義のもとでバックパッキングを実践するバックパッカー達の多くは、旅行行程に関わる諸手配の全てをバックパッカー自らが行うために、旅行行程が柔軟性に富むという特

徴の他に、次に挙げるような特徴を持つ傾向が強い。

1) 儉約

まずは、金銭面における儉約である。バックパッキングを行う期間や時期は様々であり、旅行にかかる総額もまちまちであるが、1日当たりの予算は極めて低い。移動は格安航空券や、現地の人々が多く使うバスや鉄道などの公共交通機関を利用し、食事は屋台や安価な大衆食堂ですます。宿泊においても、一室に大人数で雑魚寝するようなドミトリーをもつ安宿を利用するなど、徹底した儉約を試みるのである。節約旅行はもともと、日本のバックパッキングの源流といわれる小田実の『何でも見てやろう』[小田 1961]と、小田にも影響を与えたフロンマーの『ヨーロッパ1日5ドルの旅』[Frommer 1957]において提示された旅行のスタイルである。

フロンマーは著書で、ヨーロッパの都市の安いホテルやレストランを紹介し、目線の低い節約旅行を実践することを勧めた。節約をすればするほど、人々の生活の中に入り込み、旅先の日常を味わうことができるとし、その手段として、長期間・低予算で周遊する旅を提示した。その当時アメリカに留学中であった小田は、アメリカで隠れたベストセラーとなっていたこの著書を知ることとなった。そして、留学を終えたのち帰国までの期間を利用して、友達からのカンパと残り少ない財産をかき集めてつくった200ドルで世界へ旅に出た。小田は『何でも見てやろう』の中で、節約旅行の長所を3つ挙げている。1つは、各国の生活水準の差異が身にしみてよく判ること。2つめは、お金の媒介がないが故に、人の親切が身にしみて判ること。そして最後に、お金の媒介がないからこそ、一国の国民性、その生活様式や思考方法に至るまで、よく判ることであった[小田 1979:279-280]。小田もまた、フロンマーが提示したように、お金がない旅だからこそ現地の人々とその生活が見えたと言ったのである。この著書は日本人の海外旅行者に大きな影響を与え、節約旅行の見本として扱われた。

このようにバックパッキングが登場した当初より支持されてきた儉約という特徴は、現在でも多くのバックパッカーが踏襲している。このようなバックパッカー達の為に、各国の都市には、安宿や屋台、大衆食堂などが立ち並ぶ安宿街が登場し、ここでは出会った旅人同士でより安く生活する方法、目的地に着く方法などの情報が交換される。儉約がバックパッキングのイメージに結び付くと、予算の有無や旅の期間に関わらず、ひたすら儉約につとめ、1円でも安く旅行すること自体を旅の目的とする

バックパッカー達も現れた。一日当たりの生活費をどれだけ抑えることができるかを旅行者同士で競うなど、儉約そのものを、ある意味で楽しみながら行っているバックパッカーである。そんなバックパッカーの姿を、新井は安宿街で「嬉々としてビンボー旅行ゲームを繰り広げる」[新井 2000:155]バックパッカーと捉えている。以上より、儉約という行為自体に見出される意味、目的には時代による変化や個人差が大きいと考えられるが、儉約は多くのバックパッカーが踏襲してきた、バックパッキングの大きな特徴の一つである。

2) 荷物と服装

次にバックパッキングの特徴として挙げられるのは、バックパッカーの間で荷物と服装が類似する点である。まず、バックパッカーの中には、その語源でもある大きなバックパックを背負い旅行する者が圧倒的に多い。服装は、T シャツにズボン、または現地で調達できるラフな服装といったような軽装で、暑い国ではサンダルで街を歩くバックパッカーも多く存在する。バックパックの中の荷物は、日本人バックパッカーのためのガイドブックである『地球の歩き方』や『バックパッカーズ読本』によると、パスポート、現金などの貴重品類、最低限の衣類、日用品に加えて、日記帳、カメラ、トイレットペーパー、文庫本、南京錠、蚊取り線香、ガイドブック、折り畳み傘、洗濯ひも、懐中電灯などである[旅行情報研究会+『格安航空券ガイド』編集部 2010:63;『地球の歩き方』編集室 2008:286]。この中身と分量は旅行の期間にかかわらずほぼ同じで、むしろ長期旅行者の方が少ない荷物で旅行をする傾向がある。この中でも特に、バックパッキングに特徴的な荷物は、南京錠である。現在日本人バックパッカー必携の書として重要な位置を占める『地球の歩き方』の創刊者の一人でもある安松が、初めて海外を旅行する際、ユース hostel 協会のガイドブックの必需品のリストに「カギ」とあって、何のカギなのか戸惑った[山口・山口 2009:8]とされるように、南京錠は一般の旅行の荷物としては馴染みがないものである。この南京錠は、ドミトリー宿泊の際荷物をいれるロッカーにつける、安宿で部屋を借りた際に2個目のルームキーとして利用する、荷物を柱に括りつけ、チャックが開かないようにするなど多くの用途があるが、いずれも安全が保障されない旅行行程が前提とされたものであり、バックパッキングに特徴的な荷物であると言える。

このような服装、荷物に共通する特徴は、できる限り荷物を少なくし、最低限の持

ち物で旅行するという意識である。国を周遊し、街を歩きまわり、宿を探していくバックパッカーにとって、荷物が小さく軽いことは必須条件である。さらに、小さく軽い荷物は、その管理や、飛行機への持ち込みなど旅行する上での利便性が非常に高い[斎藤 2003:35]。荷物を背中のバックパッカー一つにまとめ、コンパクトにすることはその利便性や安全性からバックパッキングに適し、好まれるスタイルである。また、多くのバックパッカーがこれに従い、バックパックを背負って軽装で街を歩くことからこの姿はシンボル化され、次世代のバックパッカー達にイメージとして定着することで再生産されている。

3)長期間にわたる旅行行程

最後に挙げられる特徴としては、バックパッキングのスタイルを選択する人々の旅行行程は、それ以外のスタイルを選択する人々と比較して長期にわたる傾向が強いことである。具体的な旅行日数は個人差が大きい、バックパッカーの中には月単位、年単位で旅行を計画する者も多く、ガイドブック等でも長期の旅行が推奨される。

この特徴はまず、2都市以上の都市を周遊する、柔軟性に富む旅行というバックパッキングの定義を達成するために不可欠なものである。また同時に、特徴の一つ目に挙げた儉約を行う上でも重要な意味を持つ。前述の通り、バックパッカー達は儉約につとめ、安宿を探し歩き、交通手段も公共交通機関や陸路などを利用する。この際、目的地を決め、そこに到着するまでにかかる時間は、既に目的地が決まっており交通手段も確保されている場合と比較すると、数倍にもなる。パッケージツアーであれば、ある都市で、空港から送迎バスに乗りホテルについてチェックインするという一時間程の行程が、バックパッキングでは、空港から安く街に出る方法を探し、安宿のある地域はどこか尋ね、安宿と交渉して気に入らなければ次にあたるという、場合によっては丸一日かかる行程となる可能性がある。その上、行き当たりばったりの要素が強く安全性も確保されていないこのスタイルは、体調不良やトラブルなどにより、計画通りに物事が進まないことも多く、全て計画通りに行わなければ目的を達成できないような短期の旅行には不向きであると言える。

長期の旅行行程は、このような実務上の便宜に加えて、「長期であればある程、旅をしているという実感が味わえ、より現地の生活に馴染むことができる」という言説に裏打ちされて、バックパッキングに不可欠の要素として捉えられる。手塚は、海外

旅行における期間の重要性について、赤坂との対談において次のように説明している。

初めの一週間というのは、なかなかその国になじまないわけです。なれるまで一週間はかかるのです。それで二週目になりますと、慣れはじめてくるというか、落ち着いてくるのです。(中略) 自然に振る舞えるというのでしょうか毎日を自由な気持ちで送れるようになるというのは三週間目なのです。(中略) ですから一週間目で帰ってしまうというのは、その国になれてもいないし、ただ何日間過ごただけで、まだ日本をひきずったままにいるという感じがするのです[赤坂・手塚 1995:218]。

長期間いなければ本当の意味で海外の生活を楽しむことができないという考え方は、他にも、ガイドブックに「1 か月の時間をかけて旅すると『旅している』という手ごたえをしっかりと感じられるものなのだ」[旅行情報研究会+『格安航空券ガイド』編集部 2010:200]といった記述が見られるように、多くのバックパッカー達に共有され、実践される考え方となっている。以上のように、長期間に及ぶ旅行行程はバックパッキングという旅行スタイルを実行可能にする実務的な側面と、長期間であることがより旅行の意味と楽しみを増加させるという考え方に支えられ、バックパッキングの大きな特徴の一つとして機能している。

ここまで、バックパッキングの特徴として、節約、荷物と服装、長期間にわたる旅行行程を挙げてきた。バックパッキングが大衆化し、その年齢層や目的、旅行のあり方が多様化した現代において、この特徴は全てのバックパッカーに当てはまるものでは決してない。定義を満たす者の中にも、予算を気にせずに飲食や道楽を楽しむ者、おしゃれに気を遣い多くの服をもって旅をする者、短期間でいくつかの都市を目まぐるしく回る者など特徴に当てはまらないバックパッカーは存在する。しかし、多くのバックパッカー達が、前述したような特徴を示す傾向がある。

2. 日本人と海外旅行

前節ではバックパッキングの定義と、その特徴について述べた。それではこのバックパッキングは、日本社会においてどのような変遷をたどり、登場したのであろうか。日本人と海外旅行の歴史を追いながら、バックパッキングが登場した背景を探る。

(1)日本人の旅と海外渡航の自由化

山崎と小松が「日本人という人種は、昔から旅が大変に好きで、旅をすることからほとんどの芸術が生まれている」[山崎・小松 1972:326]と述べたように、日本では古くより多くの紀行文学や芸術が旅する人々によって生み出されており、旅をすることが盛んであった。タテマエとしては多くの藩で無断で旅に出ることが禁じられていた江戸時代においても、実際には数多くの「道中記」や「名所記」が出版されており、大衆は盛んに旅に出ていた。江戸時代の農民は、村から旅を目的とする人々を集め、会費を積み立てて旅費などを創出する「講」と呼ばれる地縁的有志集団を設立していた。彼らは、講の中から毎年代表者を出し、農閑期を利用して旅に出るシステムのもとで、日本の旅行形態の主流となる団体旅行を発展させた[今井・山内 1999:188]。

このように、日本において旅行は一般大衆においても盛んであったが、島国という地理的要因、2 世紀以上にわたって諸外国との交流を閉ざしていたという政治的要因もあいまって、長くにわたりその目的地はあくまで国内の湯治場や寺社であった。海外への旅行が正式に認められるようになったのは、1853 年のペリーの来航以後、1860 年の遣米使節が最初であり、それ以降数カ国に使節が派遣され、明治時代になると政府関係者や留学生が海外視察や勉強にでかけるようになった[北川 1998:128]。しかしながら、このような旅行に出かけたのはごく一部のエリートのみであり、多くの国民は外国を書物や伝えられる文化によって間接的に捉えることしかできなかった。海外渡航は一部のエリートの特権だったのである。

このような日本人の海外渡航のあり方に変化があらわれたのは、第 2 次世界大戦後であった。戦後日本は急速な復興を遂げ、国民の富や国力は増大した。1950 年代後半に高度経済成長期を迎えると、産業視察を名目とした海外視察旅行団の海外旅行が実施されるようになった[東出 2011:22]。この時代背景の中で、1964 年に国民の海外渡航が自由化されたのである。この自由化によって、旅券の取得に際し社会的に承認されるような大義名分の必要がなくなり、ごく一部の人々の特権であった海外渡航が、全国民の前に開かれた。「一度海外に行ってみたい」「違う国を見てみたい」という海外への純粋な興味・関心に従って、楽しみのための海外旅行を行うことが可能になったのである。しかしながら、航空券代は非常に高価で、自由化がなされた後も、海外旅行は一庶民にとってまだまだ敷居が高く、富裕層のみに許された行為であった[白幡 1990:450]。自由化の後、海外渡航は特権的な要素が強かったのである。

(2)パッケージツアーの登場と発展

海外渡航自由化によって、海外旅行へ出かけることができるようになった富裕層の主流な旅行形態は、パッケージツアーを利用した団体旅行であった。日本初の、海外を目的地としたパッケージツアーは、海外渡航自由化に合わせて日本航空が販売した「ジャルパック」である。「ジャルパック」は非常に高い人気を得て、海外旅行ブームの火付け役となった。この人気の背景として、白幡は、日本航空という日本人には信頼感があり、名の通ったブランド名による抜群のネーミングと海外への関心が高まっていた時代というタイミングの良さがあった点を指摘する[白幡 1990:450]。海外旅行が一般的ではなく、情報も少なかったその時代、海外旅行における多くの不安を軽減させ、全ての旅行行程を保証するフルパッケージツアーが高い人気を得たのである。もともと江戸時代より団体旅行という旅行形態が発達していた日本において、海外という未知の土地に向かう富裕層達は、パッケージツアーを利用した団体旅行を利用することで「安全な」旅行を楽しみ、日本における海外旅行の形を築いていった。

東出は、日本の海外旅行において 1970 年は大きな転換期であったと指摘し、その理由を、万国博覧会の開催や海外情報を載せた女性雑誌の創刊と、それまでの常識を大幅に超える大量高速輸送を実現したジャンボジェット機の就航としている[東出 2011:27]。このような背景のもとで、海外渡航者の数は、1972 年にはじめて 100 万人の大台を突破し[山口 2010:16]、多くの日本人が海外へ出かけるようになった。さらに、1985 年のプラザ合意を契機に円高が急激に進行すると、円の購買力が増し、海外旅行への垣根はますます低くなった。交通技術の目覚ましい発展と経済成長による国民所得の増大、円高の進行などを受けて、日本人海外旅行者数は急増した。1960 年代には 50 万人足らずであった旅行者の数は、約 40 年後の 2009 年には約 30 倍の 1,545 万人に達し[国土交通省観光庁 2010]、特権的な要素が強かった海外旅行は、誰でも気軽に消費できる大衆の余暇活動へとその姿を変えたのである。海外旅行はどんどん割安になり、また、海外旅行を扱う旅行会社も増え、パッケージツアーはその主要な商品となった。

旅行を商品として扱う際、その商品の魅力は多くの要素から成り立つ。交通、宿泊、食事、アトラクション、また特に海外旅行においてはコミュニケーションの可否や安心なども重要な要素として消費者の選択基準とされる。そもそも、パッケージツアーとは、このように多面的な商品要素を、旅行業者があらかじめパッケージ化して提

供する旅行形態であり、個人の自由裁量性を発揮するには限界がある[佐々木 2007:126]。海外旅行の大衆化と共に、海外旅行における商品要素の組み合わせ方のニーズは多様化の一途をたどった。特に、海外旅行のリピーターが増加すると、海外旅行に対する不安の要素が減り、個人の自由裁量性をより発揮できるような旅行を求める消費者が増加した。新聞の旅行の広告から、現代日本人の旅行の特徴や旅行に求めるものを分析した長谷川は、観光旅行における安心と個人性・自由性について次のように指摘している。

観光旅行に安心を求める層と個人性・自由性を求める層は異なる旅行者層を形成している。多くの人たちが添乗員に引率されたりすべての食事が用意されているという「安心」を求める一方で、海外旅行の経験者が増加するにしたがって、上記のように個人性・自由性を求める層が増加する。また周遊型の旅行ではなく滞在型の旅行では、移動も少なくホテルも固定しているため添乗員や食事がなくても不安感はなく、それよりも自分たちの自由にすごしたいという欲求が高まる[長谷川 1999b:20]。

このような消費者のニーズの変化に応え、近年では多様なオプションを加えたり、自由行動時間をいれたりすることで、個人の自由裁量性を上げ、多様なニーズに対応できるようなパッケージツアーが多く販売されるようになった。そんな中、航空券と宿、送迎のみがセットとなった非常に個人の自由裁量性が高いスケルトンツアーが登場し、近年高い人気を博している。リクルート社が運営する旅行情報サイト『AB-ROAD』による 2010 年海外旅行に関するアンケート調査では、海外旅行にパッケージツアーを利用した 62%の観光客の内、フルパッケージツアー利用者は 20%、スケルトンツアーが 25%、その中間にあたる一定の自由時間も含むパッケージツアーが 17%となっている[AB-ROAD 2011:50]。現在では、海外旅行においてスケルトンツアーを選択する人々が占める割合が最も高いことが分かる。この人気は、スケルトンツアーの自由裁量性の高さに加えて、その料金の安さにも支えられている。スケルトンツアーは、航空会社、ホテル、免税店やオプションツアー業者と旅行業者が、年間契約や仲介料といった提携を結ぶことで、消費者に格安の料金で提供できるシステムとなっている[山口 2010:203-204]。これは、場所や時期によっては、航空券や宿

などのすべてを自力で手配したり、同じ日数をかけて国内旅行に行くよりも安いことが多く、スケルトンツアーの魅力を高め、多くの消費者が選択する要因となっている。

以上のように、日本人の海外旅行は、一部の人々の特権的なものから、多くの人が気軽に楽しむ余暇活動へと変遷を遂げた。パッケージツアーは、その中で表出してきた多様なニーズに応え、様々なタイプの商品を提供しながら、日本人の海外旅行を牽引し続けてきた。現在でも、日本人の海外旅行の主流はパッケージツアーであり、多くの人々はこの旅行形態を選択し、旅行に出かけているのである。

(3)バックパッキングの変遷

社会学の加藤は、小田の著書『何でも見てやろう』[小田 1961]は、直接に自ら現地にいった世界を「見る」という行動的観察によって、書物だけを頼りに日本人が築いてきたイメージとしての海外を崩したと述べる[加藤 1968:328]。こうした海外の新しい捉え方、そしてその冒険的な旅行スタイルに刺激され、それを模範として海外を旅する若者たちが現れた。彼らは、小田が提示した長期周遊型の節約旅行を主にヨーロッパで実践していった。経済的にまだ海外旅行の敷居が高く、情報もほとんどない当時において、個人でこのような旅行に出かけるのには、相当な覚悟が必要で、その実数もごくわずかではあったが[新井 2001:114]、これが、日本におけるバックパッキングの始まりであったといえる。

1970年代に入ると、主に学生をターゲットとした海外旅行商品が次々と登場する。大学生協連による「自由交歓旅行」(1971~)、のちに『地球の歩き方』の誕生へとつながるダイヤモンド・スチューデント友の会(以下 DST)の「自由旅行」(1971~)、リクルートの「リクルート・ヤングツアー」(1976~)などが販売され、学生をはじめとする若者の海外旅行が広がった[山口 2010:96-104]。若者に売り出されたこのようなパッケージツアーは、非常に個人の自由裁量性が高いものであった。特に、DSTの「自由旅行」は、航空券と最初と最後のホテルのみを予約して、残りの約1カ月は個人が自由に旅行を行う中抜け商品であり[山口・山口 2009:28-29]、いわばバックパッキングとパッケージツアーを組み合わせた旅行商品であった。こうして、ごく少数のものだけがおこなったバックパッキングというスタイルは、次第に日本社会、特に若者に知られ、広がりを見せた。

高度経済成長と円高の急激な進行によって、日本社会において海外旅行が大衆化し

た 1980 年代には、格安航空券の手配を得意とするエイチ・アイ・エス（当時、秀インターナショナル）や MAP＝アクロス・トラベル・ビューローなど新興の旅行会社が多く登場した。格安航空券を手配する手法はさまざまであったが、結果としてそれまで高額で簡単に手が出せるものではなかった航空券を、入手可能なものへ変化させた[山口 2010:128]。このような経済状況に加え、この時代には多くのバックパッカー向けのメディアが登場する。特に大きな影響を与えたものは、DST が創刊した『地球の歩き方』（1979～）と、沢木耕太郎の『深夜特急』[沢木 1986]である。1979 年から販売開始された『地球の歩き方』は、DST の「自由旅行」で配られた、体験談と旅の手法を案内した非売品の冊子が基礎となった。『地球の歩き方』は、海外を個人で旅するための手法を膨大なデータとともに載せたもので、日本のバックパッカーのための初めてのガイドブックであった。日本のバックパッキングが大衆化した背景には、『地球の歩き方』が、日本人がバックパッキングするための詳細な手法と情報を提示することができたことがある。『地球の歩き方』創刊者のひとりである安松は、その理由を以下のように述べている。

豊富な情報は、言葉の不自由を助けてくれます。（中略）お金がない、英語もしゃべれない、現地の言葉もわからない人が、それでもどうやって旅をするか、「地球の歩き方」を市販化するころの私たちは、そんなことばかり考えていました。

これも日本人の特徴かもしれませんが、出発前の段階で、そういう情報があるかないかが、海外旅行へ行くか否か、ひとり旅ができるか否かの、決定的な部分であるような気がします[山口・山口 2009 : 91]。

『地球の歩き方』の創刊により、バックパッキングを行うための詳細な手法と情報の入手が容易になったのである。更に、沢木耕太郎の『深夜特急』は 1984 年から産経新聞で連載された、アジアからヨーロッパまでの陸路によるユーラシア大陸横断を記した旅行記である。連載開始から 2 年後には単行本化されて、ベストセラーとなった。『深夜特急』や、すでにバックパッキングに出かけた先輩・友人に憧れ、刺激された多くの若者は、パッケージツアーではなく、格安航空券のみを購入して海外旅行へ出かけていった。このように、航空券代の低下、情報量の増加、そしてバックパッキングへの憧れが格段に進んだ 1980 年代、バックパッキングは若者を中心とした多く

の人々に支持され大衆化した。

バックパッキングが大衆化し、バックパッカー向けのメディアが次々と登場するにつれ、バックパッキングは一般的にも認知されるようになった。特に、日本テレビ放送網で 1996 年に放送された、『進め!電波少年』の「ユーラシア大陸横断ヒッチハイク」のコーナーで、お笑いコンビの猿岩石が苦難を乗り越えながらヒッチハイクでユーラシア大陸を横断した姿は、日本中で話題となり、海外への貧乏旅行、個人旅行というスタイルをさらに世間へと広めることとなった[大野 2008:57-58]。1990 年代の後半から 2000 年代にかけて、バックパッキングはこのように社会的に取り扱われ、海外旅行のスタイルの一つとして市民権を得るようになった。

同時に、この時代における情報化社会の目覚ましい進展は、バックパッキングの手法を大きく変化させた。かつては、旅行者の集まる安宿街でしか購入できなかった格安チケットや、旅の情報も、インターネットを利用すれば誰でも簡単に入手できるようになったのである。海外旅行のリピーターが増加し、パッケージツアーの中でも特に自由裁量性の高いスケルトンツアーが海外旅行のスタイルの主流となることで、海外での自由行動への抵抗はかつてと比較して小さくなった。その中でさらに、バックパッキングが世間一般に認知され、そのアクセスも容易になると、バックパッキングへの抵抗感は薄まり、多くのバックパッカーが海外へ出かけることとなった。

バックパッカーの増加を受けて、特に観光需要の大きいアジアの国々を始めとするバックパッカーの受け入れ国では、彼らに向けた様々な旅行商品を開発し、売り出すようになった。ベトナムのオープンツアーバスはその中でも特に有名である。これは、ベトナム全国の主要都市を結び、乗降の日程を自分で設定できるバックパッカー向けのバスであり、いくつかの旅行会社によって格安で提供される。現地の公共交通機関を使用するための交渉や乗り継ぎの苦労がなく、しかも公共交通機関をつかって個人で移動するよりも安いことも珍しくないために、非常に便利な交通手段とされる[地球の歩き方 編集室 2008:209]。その他にも、メコン川下りのツアーや現地発着の名所観光ツアー、トレッキングツアー、少数民族の村への観光ツアー等多数の商品が生み出されている。大野は、これらの商品はバックパッカーに自分の意志で自由気ままに放浪していることを実感させる仕組みを上手く組み込むことで、大きな成功を収めていると述べる[大野 2008:277]。さらに、バックパッカーが多く集まるタイのカオサン通りをはじめとする安宿街では、これらの旅行商品を販売する日本人向けの旅行会

社が存在し、現地語や英語をつかわずとも、日本語のみで商品を購入することが可能である。バックパッカーは、インターネットやこのような旅行商品を駆使することで、以前よりも容易にバックパッキングを経験することが可能になった。

バックパッキングは、海外渡航の自由化とほぼ時を同じくして登場し、日本人の海外旅行の大衆化の中で、メディアの影響を強く受けながら、ともに成長し大衆化の道を歩んできた。海外旅行の主流であるパッケージツアーが時代の変遷と共に、そのニーズの変化を受けて多様化してきたように、バックパッキングもまた大衆化と時代の変化を受け、変質している。

3. 日本におけるバックパッキング文化

以上に述べたように、パッケージツアーやバックパッキングといった日本人の海外旅行のスタイルは、日本社会の政治、経済、メディアなど多くの文化的要素の影響を受けながら発展し、変化してきた。また逆に、現代の日本人の余暇活動の大きな部分を占める観光旅行のあり方は、日本人の生活のあり方、ものの考え方に大きく影響する可能性が高い。そもそも文化とは、人間の知的な思考とそれにより獲得された生活様式の総称であるとする、観光旅行の捉え方、考え方もまた、この文化を形成する要素である。長谷川が、「大衆化された現象としての観光旅行行動は、余暇にかかわる日本の大衆文化現象のひとつとしてとらえることができる」[長谷川 1999a:2]と述べるように、観光旅行はもはや大衆に浸透した文化現象であり、「観光旅行文化」を築いてきた。この観光旅行文化の中の一要素がバックパッキングという旅行スタイルへの認識とその様式、すなわち「バックパッキング文化」である。観光旅行文化、バックパッキング文化は日本社会の中で他の文化要素の影響を受けながら独特の発展を遂げてきた。特に、これまでに見てきたとおり観光旅行の大衆化は、観光旅行に対する認識とそのあり方を大きく変えたと考えられる。

日本人の観光旅行の大衆化による変質を捉える際に重要となってくるのが、「旅」と「旅行」の意味的差異である。「旅」に対し、多くの日本人が抱くイメージは、「自然の中におのれを求めて一人で行う、人生的な教訓を得られるような行為」であった[中谷 1973:37;白幡・加藤・樺山 1990:455]。これは、かつて常に隣り合わせにあった死や危険のイメージと重ねられることで重みを増すと共に、多くの人々にとっての憧れとして捉えられてきた。これに対し「旅行」は、目的地に移動し、自分の知らないも

のを見て楽しむというレジャー活動であり、「旅」にあった危険や死というイメージは払拭される[中谷 1973:37;白幡 1990:446;白幡・加藤・樺山 1990:455-456]。大衆化によって多くの人々が観光への参加を希望するようになると、そこにより安全で不安のない楽しみとしての「旅行」の側面が求められるようになった。むしろ、観光旅行を大衆化するための条件が、一般の人々でも大きなリスクを背負うことなく気軽に参加できる形を提示することであったとも言える。江戸時代における、講による地縁集団を利用した団体旅行、海外旅行におけるパッケージツアーなどを発明し、リスクを軽減させることで日本の観光旅行文化は大衆へと広まり、それがさらに観光を「旅行」化したのである。

一方で、「旅」への憧れも、日本の観光文化にとって見逃すことのできない要素である。多くの日本人が、「旅」を高く評価し、「旅行」は本当の「旅」ではないと批判する。長谷川は、旅行商品の広告におけるキャッチフレーズや写真による表現の中で「旅行」という言葉はまったく用いられず、もっぱら「旅」という言葉が使用されている点を指摘し、日本人の観光旅行には「旅」が求められていると述べる[長谷川 1999b:27-28]。しかし、実際には「旅行」への参加率が圧倒的に高く、その満足度も高い[中谷 1973:37]。このような日本の観光旅行の二重性について、中谷は以下のよう

おそらくそれは“旅”という行為の問題ではなくて、“旅”という言葉がもたらす想像力の問題だったと思われる。つまり“旅”は「奥の細道」という書物の中に、あるいは歌舞伎の舞台の上に、昇華されて生きてきた一つ概念である。それは日本人の旅という行為に、統一的な想像力と活力を与えるという役割を通じてのみ、旅とかかわり合ってきた美意識だと言えよう。(中略) 一見、たて前とほん音の二重構造に見える日本人の旅は、このようにみごとに整理されていて、“旅”は想像力の分野に、“旅行”は行為の分野に、各々きっちり納まっている[中谷 1973:38]。

「旅」というスタイルに対する憧れは旅行への美意識として機能しながら、実際には「旅行」がその需要をうけて成長してきたのである。海外旅行に関してみると、海外に慣れることにより、旅行中の安心と楽しみが比較的容易に獲得できるような時代

の変化を受け、「旅」への憧れと美意識が働き、より個人の自由裁量性が高く「旅」のイメージに近い「旅行」が人気を得て、パッケージツアーの主力商品となっている。

そんな中、憧れの「旅」のイメージをより体現した旅行のスタイルがバックパッキングであると捉えられた。それは、「旅」のもつ「苦勞」「困難」「さすらい」「未知のものの発見」といったイメージが[長谷川 1999b:25]、小田や沢木などがその著書で示したバックパッキングの実経験と極めて親和的であったためである。この「旅」のイメージが多くの日本人をバックパッキングによる海外旅行へと誘引した。一方で、ここまで述べたように、バックパッキングの人気に目を付けた旅行業者やメディア、受け入れ国による多くのバックパッカー向けの商品、また交通技術の進歩や高度情報化社会の到来を受けて、バックパッキングはより安全に気軽に行うことのできるものへと変質した。バックパッキングは海外旅行における「旅」のイメージを維持しながらも、時代の変遷と共に「旅行」的側面を強めてきたのである。

スケルトンツアーなどの自由裁量性の高いタイプの登場により、「旅」のイメージに近づく傾向のあるパッケージツアーと、大衆化・商品化によって「旅行」的側面を強めてきたバックパッキングは、ある意味でその差異を縮小させ、同質化してきた。これを象徴的にあらわすのが、日本人バックパッカーのバイブルとしてほとんどのバックパッカーが携帯する『地球の歩き方』シリーズの変質である。バックパッカーの為のガイドブックとして登場した『地球の歩き方』は、本の知名度の上昇とパッケージツアーにおける自由時間の拡大があいまって、次第にスケルトンツアーをはじめとする個人旅行者の読者を多く取り込むようになった[山口・山口 2009:289]。この本の創刊者の一人である安松は「こうした読者の多様化とニーズの変化の中で、本に載せられる旅行情報の種類も、より正確で絶対に失敗しないための情報へと変化してきた」と語っている[山口・山口 2009:233-234]。バックパッカーとパッケージツアーを利用する旅行者は、同じガイドブックから得られる正確で安全な情報をもとに旅行するようになったと言える。

このような同質化の中で、なおバックパッキングを選択して旅に出る現代のバックパッカーは、バックパッキングに何を求め、また何を為すことでバックパッカーとしての自分を確認するのであろうか。次章では、バックパッカーへのインタビューをもとに、現代のバックパッカーの意識を探る。

第3章 日本人バックパッカーと「自由」

1. バックパッカーが描くパッケージツアーとバックパッキング

パッケージツアーとバックパッキングは歴史的変遷の中で同質化の方向へ進む様相を呈しているが、現代日本人バックパッカーは両者をどのような認識をもって捉えているのだろうか。

ここからは、筆者が2011年7月から11月にかけて行ったインタビュー調査を基に分析を進めていく。調査対象者は、11名の現役日本人バックパッカー（2011年8月にタイ・バンコクのカオサン通りにてバックパッキングを実施していた日本人）と、9名のバックパッカー経験者（過去にバックパッキングを実施し、現在日本に帰国している日本人）の計20名（男性14名、女性6名）である。20名を便宜上A～Kのアルファベットで表し、各々の背景、旅の概要は文末注に示すこととする。

(1) パッケージツアーのイメージ

1) フルパッケージツアー

多くの日本人バックパッカーがパッケージツアーについて問われた時、初めに抱くイメージはフルパッケージツアーに関するものである。その論点は、バックパッキング経験の多少やその他条件の差異に関わらず共通しており、大きく3点に集約される。まず1点目は「安心・安全」である。フルパッケージツアーといえば良いホテルと食事がついてくる。車での送迎があり現地ガイドが案内してくれるため道に迷うこともない。何をするにも常に安心で安全な旅行形態としてフルパッケージツアーは認識されている。これに付随して2点目に挙げられる点が、「楽」であることである。自分が何もしなくても情報を得ることができ、車に乗っていればいろいろな観光地に連れて行ってくれる。「安心・安全」で「楽」であることはフルパッケージツアーを主催する旅行会社が商品の売りとするポイントであり、パッケージツアーの利点である。つまり、旅行会社の提示したいイメージとバックパッカーが挙げるフルパッケージツアーのイメージはこの2点においては一致しているのである。しかしながら、バックパッカーがこの「安心・安全」、「楽」に関して語る時、この2点は利点としてではなく、「リスクの少ない」、「初心者向けの」という意味を持つことが多い。

(パッケージツアーは) リスクが少ないよね。宿があるからこそ安心できることもあるし。だから、入り口としてはすごくいいんじゃないかと思うけど。海外旅行入門みたいな。(A さん⁽¹⁾)

バックパッカーにとって、リスクが少ないということは必ずしも利点ではないのである。この理由が3点目の論点に挙げられる。それは「見たいものが見られない」というイメージである。

今までツアーに参加していて、バスに乗っけられて動いて、でもそんなに面白くなかったんだよ。遺跡とかたいして興味ないし。結局夜に抜け出して行く屋台が一番面白かった。ツアーだと自分で見たいものが見れないんだよね。(J さん⁽²⁾)

この「見たいものが見られない」というイメージは、リスクを少なくすることによって生まれる弊害として捉えられている。ここには、行動的制約と時間的制約の両者が含まれる。行動的制約とは、フルパッケージツアーによって連れて行かれる場所は用意された空間であり、そのルートの中には「見たいもの」が見られないということを目指す。一方で時間的制約とは、たとえ「見たいもの」が見られたとしても、すぐに次に連れて行かれてしまい、自分が見たいだけ見ることができないということを目指す。そのようなフルパッケージツアーへの否定的なイメージがこの論点に集約されているのである。

ここでいう「見たいもの」とは、何を示しているのだろうか。行動的制約に対して「見たいもの」が語られる時、それは観光地ではなく現地の人々の実際の生活をさすことが多い。この時、観光地は用意された空間であり、本物ではない「見せられるもの」という意味を持ち、その対比として「見たいもの」が語られる。

ツアーの人のイメージって、タイといえばほほ笑みの国とか、舞踊とか、カニとかでしょ。だけどそんなものタイの人は実際に見たことがないんですよ。実際にしている生活じゃないものを見ることになる。(M さん⁽³⁾)

一方で時間的制約に対して「見たいもの」が語られる時、その目的地はフルパッケ

ージツアーと同じ観光地であっても問題がない。時間に追われるようにして見るのではなく、気に入った観光地に自分がいたいだけいられることによって、「見たいもの」が見られるとされるのである。この時、「見たいもの」とは、あるものに対して用意された理解や解釈とは違う自分なりの理解を加えることとしての意味を持つ。

向こう（フルパッケージツアー）のほうに時間が制約あるから、その中で満足するまで見るとしたら、ツアーっていうのもありなんじゃないのってのはあるけど。向こうの見方としては、ガイドさんがついて説明してくれる通りの理解をして。（中略）でも目から入ってきた情報だけでは、わーすごーいで終わるだけであって、僕は僕なりにその遺跡とか自然を解釈するっていう時間を割と大事にしてる。（A さん⁽¹⁾）

「見たいものが見られない」ということは、行動的制約と時間的制約によって、見るものとその理解の仕方があらかじめ定められてしまっているというイメージを意味する。このように全てが定められたフルパッケージツアーに参加することは、「わざわざ人の旅行を経験しに行く」（M さん⁽³⁾）ことと捉えられ、ゆえに「ツアーはしばられているという印象が強い」（R さん⁽⁴⁾）とされるのである。

2) スケルトンツアー

これに対し、スケルトンツアーは、自分で決めた場所に行き、自分の「見たいもの」を、集合時間に囚われることなく見て理解することができる。つまりフルパッケージツアーに対する否定的イメージをつくり出す「見たいものが見れない」という論点は、スケルトンツアーには適応されない。多くのバックパッカーが、スケルトンツアーはフルパッケージツアーと比較して安価でより自由な旅行のスタイルであることを認めている。しかし、それでもなおバックパッカーが捉えるスケルトンツアーのイメージは、やはり制約がありしめられた旅行のスタイルである、というものである。

そもそも行きたいところが一つの国だけのことが少ない。しかも行ってみたらそこにどれくらいいるか決めたいんだよね。でもスケルトンツアーだと、そういう訳にはいかないでしょ。何箇所か行きたいところだけ決めて、滞在期間は来

てから決めるってことができないから。(Qさん⁽⁶⁾)

スケルトンツアーは、航空券と宿泊する場所が定められているため、旅行者は旅行の日程とルートを変更することができない。これらが他者によって定められた場合でも自分で定めた場合でも旅行の形があまり変化しない短期・滞在型の旅行においては、スケルトンツアーを選択することによって受ける制約は小さい。しかし長期間の旅行や、拠点を変更しながら周遊していく旅行においては、スケルトンツアーはフルパッケージツアーと同様に制約の大きい旅行形態であり、しばられた旅行として捉えられるのである。したがって、行動的制約や時間的制約はフルパッケージツアーと比較して大幅に緩和されてはいるものの、スケルトンツアーはやはり否定的イメージの対象となる。

(2)バックパッキング像

バックパッカーが描くバックパッキング像は、これらのパッケージツアーのイメージの対極に位置する。すなわち、さまざまな制約が限りなくゼロに近く、「しばられていない」旅行のスタイルとしてそれはイメージされている。

まず、バックパッキングは行き先や時間、旅行の手段に制限を受けない。いろいろな場所を長い時間をかけて訪ねる人こそがバックパッカーとされる。この時、周遊する場所の数は多ければ多いほど、また旅行の期間が長ければ長いほど理想的なバックパッキングとされ、他のバックパッカーからの憧れの対象となる。

旅の理想としては、お金と時間を気にせずに、行きたいところに行きたいだけ行くっていうのが良いよね。(バックパッキングしている途中で) バイク夫婦旅って人もいたんだけど、すごいなあと思って。スタイルが無限大で、うらやましいなと。(Aさん⁽¹¹⁾)

さらに、バックパッキングにはパッケージツアーにはない出会いがあり、多くの人とコミュニケーションをとりながら旅行を続けていくものだということもバックパッカーの間で共有されるイメージである。この出会いは誰かにあらかじめ定められたものではなく、あくまで偶発的なものである。バックパッキングは多くの予期せぬ出会い

をもたらし、その出会いが自分ならではの唯一無二の旅行を作っていくと捉えられている。実際には、ドミトリーやシングルなど宿の種類の選択、旅人への接し方、積極性など個人の裁量によってバックパッキングがもたらす出会いの数は大きく変化する。前章で見たように、バックパッキングの商品化は多くの情報と安易な旅の手段をバックパッカーに提供しており、最低限の人との接触だけで旅行を完結することができるようになった。しかしながらバックパッキングは、多くの人との偶然の出会いを持てる旅行としてのイメージを持ち続けており、その出会いの数が多いことがバックパッキングの理想として語られるのである。Bさんはバックパッキングをするにあたり、既にバックパッキングを経験していたAさんのアドバイスを受け、バックパッキング中もAさんと連絡を取り合っていた。BさんはAさんのバックパッキングと自分のバックパッキングを比較しながら、出会いについて以下のように述べている。

Aさんの方が旅人だと思うよ。Aさんはすごく出会いを持ってるから。旅先で知り合った日本人と今でも仲良くしていて、旅が日本に帰ってきてからも続いている。僕の場合は帰国したら旅が終わってしまった感覚がある。エンドレスで旅をしていることがすごいなと思う。(Bさん⁽⁶⁾)

多くの出会いとつながりを持つことこそが「旅人」の条件であり、帰国後もそのつながりを維持するAさんは、帰国によって「旅」が終結したBさんと比較して、より「旅人」であると語られている。また、バックパッカーの語りの中で、「真のバックパッカー」「本当のバックパッカー」という表現が使われることがある。この言葉は、バックパッカーの理想とする姿と憧れの旅行形態を示し、この理想と実際に自分が行うバックパッキングを比較する中で、バックパッカーは両者に差異があることを自覚する。

描いていたバックパッカーってもっと果てのないもので、いつ日本に帰るのか分からない位のもの。うちは終わりのあるバックパッカーだったからちょっと違うかなって。『深夜特急』の作者の沢木さんみたいに、期間や場所は決まっていなくて、旅そのものが人生だ、みたいな人がバックパッカーだと思う。うちは旅が生活にはなったけど、人生にはなってなかった。可能性としてずっと旅を続け

てしまうかもしれない、そういう人が真のバックパッカーだと思う。(D さん⁽⁷⁾)

自分は半バックパッカーだと思ってるよ。本当のバックパッカーっていうのは、それこそ 2~3 カ月以上旅をしていて、観光以外の生活をしている感じ。その辺の街でうろうろしているイメージかな。(Q さん⁽⁶⁾)

D さんは 1 か月のバックパッキングを経験したが、「終わり」がスタートの時点から定められている自分の状態を指して、「真のバックパッカー」ではなかったと語っている。それに対して Q さんは、バックパッキングの期間的な問題を語ると同時に、有名な観光地しか回っていない自分に対して「観光以外の生活」を送っていることを「本当のバックパッカー」の条件として挙げている。ここで挙げられる「真のバックパッカー」「本当のバックパッカー」とは、各々のバックパッカーが示す理想のバックパッカー像であり、B さんのいう「旅人」と同義であると捉えることができる。

この理想のバックパッカー像が語られる際に共通しているのは、自分が行うバックパッキングと比較して、未確定な要素が多ければ多いほど憧れの対象となることである。先に述べたように、期間は長ければ長いほど、場所はその選択肢が多ければ多いほどよく、旅行の「終わり」やルートは決まっていない状態が最も理想とされる。旅行者として観光地を回することはあらかじめ予想できることであるが、観光地を回るのではなくもっと違う行動が取れること、また多くの偶然な出会いを持つことで、旅行の始まりの時点では予期できなかった旅行を経験することが理想のバックパッキング像として捉えられている。

バックパッカーが描くバックパッキング像とは、究極的にはスタート時には何も決まっていない、旅行のすべてが未確定的な状態のことである。旅行の中で起こる偶然と、その瞬間の思いつきによって生活の全てが左右されるからこそ、「旅そのものが人生」(D さん⁽⁷⁾)なのであり、何事にもしばられていない旅行形態として捉えられる。

(3)「旅」と「旅行」

ここまでに見たように、制約のあるしぼられた旅行形態としてイメージされるパッケージツアーと、すべてが未確定的で何事にもしばられていないバックパッキング像は対極の位置をなし、相反するものとして語られている。

しかし実際のバックパッキングでは、すべてが未確定的な状態で行われることはまれであり、バックパッキング像はあくまで理想の形に過ぎない。多くのバックパッカーは、理想のバックパッキング像に憧れながらも、旅の期間や行動に何らかの制約をもった状態でバックパッキングを行っていることを自覚している。この自覚が「自分は半バックパッカー」(Qさん⁽⁵⁾)であるというような表現を生んでいるのである。一方で、短期・滞在型という条件下において、スケルトンツアーはその制約を限りなく小さくできる。実質的にはこのスケルトンツアーとバックパッキングは同程度の制約を受ける可能性があると考えられる。しかしバックパッカーは、この両者を明確に区別する。

フリープラン(スケルトンツアー)は自分のペースで行きたいところに行けるけど、ツアー(フルパッケージツアー)だと時間が決められちゃう。バックパッキングも、自分のペースで行きたいところに行けるって点ではフリープランと同じ。ただ、フリープラン単発でいくと旅行って感じがするけど、バックパッキングは生活を送りながら旅をしているって感じだよね。(Hさん⁽⁸⁾)

ここでは自分が選択できる範囲が同じであったとしても、スケルトンツアーは「旅行」であり、バックパッキングは「旅」として捉えられている。つまり、苦勞を伴いつつも現地で生活を送りながら移動を続ける「旅」への美意識はバックパッキング像に投影され、あくまでレジャーとして楽しむための「旅行」のイメージをパッケージツアーが請け負うという構造は、両者が同質化しつつある現代においても変化していないのである。バックパッカーにとって、フルパッケージツアーもスケルトンツアーも制約の大小はあるがどちらも「旅行」であり、それに対してバックパッキングは「旅」であるという異なるラベリングがされるのである。

2. バックパッキングと「自由」

(1) バックパッキングの魅力

バックパッカーは自らが行うバックパッキングを、理想のバックパッキング像とは異なるものだと自覚しながらも、なお「旅」として認識し評価する。これは、実際のバックパッキングの経験の中に「旅」を実感することのできる要素が存在するため

ある。バックパッカーはこれらの要素をバックパッキングでしか味わうことのできない魅力と感じ、それを「自由」という言葉で表現する。この言葉は多くのバックパッカーによって使われるが、そこに内包される意味は多様である。ここでは、彼らによって語られるバックパッキングの魅力を、「自由」の意味に注目しながら 4 つに分類する。

1) 行動・時間の「自由」

1 つめの「自由」として挙げられるものは、フルパッケージツアーへのイメージで挙げられた行動的制約と時間的制約の対極に位置する概念である。バックパッカーは、実際には課せられる旅行の期間などの制約が許す範囲の限りで、ある一定の自由な時間をもつことができる。ここでいう自由な時間とは、「予定が決まっていない」、「何をするかを決められていない」時間のことを指す。この時間をいかにスケジューリングしていくかを、自分の意志によって決められる状態を、バックパッカーは「自由」と認識するのである。そして自分が今何をしたいのかを考え、自己責任によってその時間の使い方を決めていくことに自らの自立や自主性を見出している。

バックパッキングやってると、世界は広いんだな、こんな国でこんな人たちが生きている、じゃあ自分はどう生きたいんだって考えるんだよね。主体性がなくても生きていける修学旅行なんかは全然記憶に残らないけど、バックパッカーは真剣に、何がしたいのか、明日どこに行きたいのかって考える。

バックパッカーじゃないと味わえないと思ったのは、1 日かけてバスセンターを探しまわったことかな。めちゃめちゃ疲れたけれど、迷ったことで出会いもあったし、普通だったら行かないようなところにも行けて、決して無駄じゃない面白い一日だったなあって。あと、バスに乗って移動している時もここでしか味わえない経験をしているなって感じて良かった。自分で生きている、頑張ったって思っ。(D さん⁽⁷⁾)

ここで時間の使い方として重視されているのは、効率ではなく、自分の力でいかに目的を達成できたかということにある。D さんは、バスに乗るという目的があったが、道に迷い、本来ならば数時間で着くはずのバスセンターを探して 1 日歩きまわった。

このバスセンターを探して歩いた時間自体を、Dさんは「ここでしか味わえない経験」として魅力に感じたのである。つまり、Dさんにとって目的はバスに乗ることにあったが、後に振り返った時、経験的な魅力として意味をもったのは、バスセンターを探し見つけたことであり、目的を達成するまでの過程そのものだったのである。このような経験は、多くのバックパッカーによって語られ、彼らはそこから達成感や成長の実感を獲得している。

自分で組み立てて街をうろうろするのが楽しい。自分ができたって思えるのが嬉しくて。なんかロールプレイングをやってるみたいな感じ。(Pさん⁽⁹⁾)

自分でチケット取ったりしながら旅するのに冒険的要素があって、経験値をつんでるなっていう感じがする。行きたいところに自分で行けたっていう喜びがあるよね。(Qさん⁽⁶⁾)

自己責任において行動し、誰も面倒を見てくれない環境の中で、目的を達成するためには自分の力で困難や苦勞を乗り越え解決していかななくてはならない。その過程が「冒険的」なのであり、自己変革や人生的教訓をあたえる「旅」のイメージと重なる。ここでは、ある程度の困難や苦勞は、Pさんのいう「ロールプレイング」をクリアするためのアトラクションとしての意味を持つ。

私は自由が好きだからバックパッキング選んでる。ツアーとかだとどうしても決まったものになっちゃうけど、ホステルを探したり、値引いたりすること自体が楽しいと思うんだよね。時間はかかるけど、ある意味迷いたって気持ちがあるって。(Fさん⁽¹⁰⁾)

Fさんにとって「迷う」という困難は、バックパッキングを楽しむ上で必要な要素であり、「自由」であることの魅力として捉えられている。

つまり、この行動・時間の「自由」によって得られる魅力とは、自分がしたいことを主体的に考えて実行できることに加えて、その実行の過程で困難や苦勞を経験でき、それを乗り越えることによって達成感や成長の実感を得られるという点にある。

2)安心・安全・安定からの「自由」

次に挙げられるのは、安心・安全・安定的なものではない不確実なものにアクセスする「自由」があるという点である。既に安全であることが確認されたものではなく、リスクを冒して未知のもの、危険なものに挑戦することは、刺激があり魅力的なものとされる。

安全なものだけでなく、現地の人たちが食べているものとかに挑戦できるのも魅力かな。リスクを冒す楽しさってあるよね。もちろん不安はあるけれど、なんとかなるでしょうって思って。日本はすごい安全であんまりリスクを感じることもってないから、やっぱり海外の方が刺激ある。一人でいると怖いとか、そういうことを感じる事自体、勉強になったなって思うよ。快適な旅よりも汚い旅の方がやっぱり思い出になる。(Fさん⁽¹⁰⁾)

「一人でいると怖い」といったようなスリルは、旅行を続ける間解決されることはない感覚であり、前項で挙げた達成感や成長の実感を味わうための困難や苦労とは少し異なる。ここで求められているのは、日常では感じることのできないスリルや刺激であり、次にどうなるかは分からない不確実な状態に自分を置いているという実感である。

また、この不確実性は予期できない事件や偶然の出来事を通して語られる。Gさん⁽¹¹⁾は、バングラデシュからインドへ向かう際、アライバルビザが取得できずバングラデシュに3日間足止めされるという問題に遭遇した。19日間という限られた時間の中で3日間足止めされたことにより、もともと陸路で回ろうと考えていたコルカタからムンバイまでのルートを空路で向かわざるを得なくなった。この事件についてGさんは次のように述べた。

予想しない出会いがあるのがバックパッキングの魅力だと思う。ビザ問題が起こった時、口論になって、助けに来てくれた人がいたり、問題を通していろんな人と出会えた。面倒だし大変だったけど面白いと思う。問題の真ただ中にいる時は本当にいらいらしてたけど、問題が解決して1日2日たったなら、こんな経験できないんじゃないかって思って。(Gさん⁽¹¹⁾)

Gさんは始めからあえてリスクを冒す刺激を求めていたのではなく、ビザが取れないという問題が解決するまでの間は、この出来事にいらだち、怒りを感じていた。しかし問題が解決してから振り返った時、この予想できなかった事件と偶然の出会いを「面白い経験」と肯定的に捉え直し、それこそがバックパッキングの魅力だと考えたのである。これは、当たり前に進むはずであった計画がうまくいかなかったこと、つまり安定的なものがそうでなくなった経験を、自分のバックパッキングにおける不確実性と後天的に捉え直し、自分にしか味わえない経験として評価し直しているのである。

安心・安全・安定からの「自由」によって得られるのは、自分のバックパッキング経験における不確実性の認識であり、これは「旅」である理想のバックパッキング像と自分の状態とを重ね合わせ、「旅」を実感することのできる要素として機能している。

3)感性・感情の「自由」

3点目は感性と感情に関する「自由」である。この「自由」は、旅行中に見たものや起こった出来事、その他もろもろの現象を自分がいかに捉えるかが制約されていないという意味で使用される。Aさんは団体旅行と比較した時に、バックパッキングをはじめとする個人旅行のものの見方の違いについて次のように語る。

見るものの深さとか、感じる深さとかっていうのは、個人旅行の方がね。自分の中での満足感っていうのは得られると思う。どういう表現をしたらいいかなあ。僕個人的には、その空間にどっぷりつかってしまう感じ。人が大勢いる時間もあるし、一人っきりの時間もあるって、その時その時で、大勢の人にみられている遺跡と、自分ひとりにみられている遺跡の両方を見ながら、この遺跡にはどういう歴史があるのかとかガイドブックで読んだものとか、どうやってこの遺跡はできたんだろうってことを想像したりしながら時間を過ごしたり。(Aさん⁽¹⁾)

ここで重要視されているのは、遺跡に関する知識やその一面的な姿ではなく、「空間にどっぷりつかると」ことによって得られる「感じる深さ」や「満足感」である。同様にOさんは、フランスの美術館でみたパッケージツアー客と比較しながら解釈のあり方について次のように語る。

(パッケージツアーの人たちは)美術館とか行っても皆で有名な絵だけ見て回ってるけど、いっぱい他にもあるじゃん、絵見ろよって思ってさ。有名な絵だけ見るだけだったら写真でいいじゃん。説明聞いて話の内容分かってても、分からないものは分からないんだから、俺は感性だけでいいと思ってる。(Oさん⁽¹²⁾)

Oさんもまた、重要なのは感性で理解することであり、ただ説明を聞いて見るという行為は写真を見る行為と変わらないと捉えている。つまり、ものごとの理解に関してバックパッカーが求めているのは、自己の感性のストレートな表出であり、これによってはじめて獲得できる自分独自の解釈であると言える。これは、感情に関しても同様に語られる。

バックパックしていて一番楽しいなと思ったのは、喜怒哀楽がはっきりしてるなってところだったんだよね。怒る時はすごい怒るし、客引きに対して怒鳴ることも、「ばかじゃないの」っていうこともあるでしょ。でも、逆にいいひとと出会ったら思いっきり笑うし、自分が不甲斐ないって思った時は自己嫌悪になってとことん落ち込むし、喜怒哀楽がすごいはっきりしてて楽しいなって思うことがあった。(Bさん⁽⁶⁾)

先に述べたようにバックパッキングは困難や苦勞を伴うものであり、予期できない様々な出来事が起こる。これに対応するバックパッカーには、安全や安定によって生まれる心の余裕がなく、「喜怒哀楽」すなわち感情が、理性などに抑えられることなくストレートに表現されやすい。この状況の中で、普段の生活では気付かなかったものごとに対する自らの心の動きを、驚きをもって発見するのである。

バックパッキングやってると、ああ自分ってこういうことに怒るんだとか、そういうことに気付いて、自分の気持ちを客観視できるんだよね。(Iさん⁽¹³⁾)

感性・感情の「自由」とは、自分の感性や感情をストレートに表出できる環境のことをさし、この環境の中で、ものごとや自分自身をありのままに深く理解できること

が魅力として捉えられている。そしてこの理解のあり方に、他者と同じように考え同じようにものごとを理解する「旅行」とは違う、自分にしか体験できない「旅」のオリジナリティを感じるのである。

4)人間関係の「自由」

4点目の「自由」は、人間関係のしがらみがなく、新たな出会いを持てるという意味を内包する。いわば、人間関係の「自由」である。理想のバックパッキング像で挙げられているように、偶然の出会いがそれ自体が「旅」を感じさせる要素として機能する。実際のバックパッキング経験の中で、このような偶然の出会いに直面したバックパッカーは、その経験を「旅」の魅力として捉えるのである。

バックパッキングをしていた時、いろんな出会いがあった。ハンガリーの公園で座ってたら、なんかハンガリー人のおっちゃんが話しかけてきて、いろいろ話したんだけど、その人は大学の教授やってる人だったみたい。結局そのあと3日間ぐらいその人がハンガリー案内してくれたりして。バックパッキングしてて楽しかったなと思うのって、こういう人との出会いがあった時だった。(I さん⁽¹³⁾)

「旅」ならではの偶然の出会いに対する願望は多くのバックパッカーに共通する。そして彼らは、バックパッキングをこの偶然の出会いのチャンスを与えてくれるものとして捉えている。

日本人がたくさんいるリッチなホテルに泊るより、ホテル探し歩いた方が会えて多いよね。人と話したり、触れ合いたい。建物とかよりもそっちに価値を置いてるからバックパッキングしてる。(S さん⁽¹⁴⁾)

ドミトリーにずっと泊ってたよ、安いから。あと出会いあるしね。宿では、旅行者と旅の話ばかりしてた。それまでどの国が良かったとか、あと武勇伝的なのか。出会いないとなんか寂しい。(A さん⁽¹¹⁾)

S さんにとって「ホテルを探す」こと、A さんにとって「ドミトリーに泊る」こと

など、バックパッキングの特徴を示すともいえるこれらの行動は、出会いの手段として語られ、新たな人間関係を築くことがこの行動の目的とされている。

一方でCさんはバックパッキングで出会い、共に行動する人に条件をつけ、自分の形成する人間関係を選択しているようでもある。

(バックパッキングしてる間は)日本人とはあまり一緒に行動しないかな。相手が英語話せなかったりすると、そいつとばかりになっちゃうじゃん？俺が他にも行けなくなっちゃうし。人と一緒にいると気遣っちゃうから。俺自己中だし。

(Cさん⁽¹⁵⁾)

Cさんは、日本語によって「そいつとばかり」の人間関係が築かれてしまうことを嫌い、いつでも「他にも行ける」状態を望んでいる。いつでも「他にも行ける」状態とは、築かれた人間関係をいつでも解消し新たな人間関係を築ける状態をさす。Cさんはあえて日本人との行動を避け、固定的な人間関係から解放されることで多くの出会いを得られる状態をつくり出しているのである。

人間関係の「自由」とは、固定的な人間関係を解消することによって新たな人間関係を形成していける状態であり、バックパッカーはこの「自由」によって得られる出会いに「旅」を実感するのである。

(2)「自由」とはなにか

このように、バックパッカーが自らのバックパッキング経験を「旅」として実感する具体的な要素は、多様である。困難を乗り越えることによる達成感や成長の実感、リスクを冒すという刺激とその不確実性からくる不安、ものごとの捉え方のオリジナリティ、出会い、このような様々な要素を自らの経験の中に見出すことによって、バックパッカーは自らのバックパッキングを「旅」と位置づけるのである。

これらの要素を生み出す要因は、「自由」であるという言葉に集約される。「自由」が「不自由」な状態から解放された状態を指すとする、バックパッカーはどのような状態を「不自由」と想定しているのだろうか。

バックパッキングの魅力を語る中で、Dさんは行動・時間の「自由」に対する憧れを語っている。

スケジュールが決まっていなくてことがやっぱり魅力だと思う。自由で、信じられないこともあるし、つらいこともある。そういう路線に則らないことへの憧れっていうか、スケジュールに従わないってことへの憧れをかなえられる。(Dさん⁽⁷⁾)

Dさんにとって、「不自由」とはスケジュールに従った、路線に則った生き方であり、そうでない「自由」な生き方に憧れを抱いている。スケジュールに従った、路線に則った生き方というのは、言葉を変えれば効率的で常識的な生き方であり、現代日本において多くの人々に肯定的に共有される価値観である。Dさんもまた、日本での日常生活においてこの価値観のもとで行動しているからこそ、その価値観から外れることはDさんにとって「憧れ」なのである。つまり、この他者と共有された価値観に従って生きる状態が「不自由」な状態として捉えられている。

また、リスクを冒す楽しさ、すなわち安心・安全・安定からの「自由」について語ったFさんはその発言の中で、「日本はすごい安全であんまりリスクを感じることでないから、やっぱり海外の方が刺激ある」と語っていた。ここでいう「不自由」とは、安全な日本での生活であり、そうでないリスクのある海外の生活に対して「自由」を感じていることが分かる。同様にそれぞれの「自由」について語るバックパッカーの語りを分析すると、感性・感情の「自由」で想定される「不自由」とは、安心で安全な状態から得られる心の余裕や理性、またものごとに対する他者との共通した認識をもった状態であり、人間関係の「自由」によって想定される「不自由」とは、固定的な人間関係があり、すぐには解消できない、ある意味で他者に必要とされた状態のことを示している。ここから見えてくる日本人バックパッカーの想定する「不自由」な状態とは、安全な日本という母国で社会的役割をもって過ごす日々の生活、つまりは日常である。

日常では日記をつける習慣がないSさんは、バックパッキングに出る時だけはお気に入りのノートを見つけ、毎日日記をつけるという。この理由についてSさんは、「旅していることは特別だから」と述べる。

旅する楽しみのために普段生活しているような気である。別に日常が嫌いなのではないけれど、違うことをすると生きてるなって気持ちになれるから。そん

な特別なものとして、旅の時は日記を書いてる。単調な日々は過ごせない。けど日本にいとそんなにくつろげないし。(Sさん⁽¹⁴⁾)

Sさんにとって日常とは嫌いではないが単調な日々であり、日本にいるかぎりは「くつろげない」のである。その「不自由」な日常を打開してくれるものが「旅」であり、そんな特別な状態にあるからこそ日記をつけるのだという。

同じように、Aさんも普段は日記をつける習慣がないが、バックパッキングしていた時は毎日欠かさず日記をつけたという。その日記は、A4サイズの2冊のノートをぎっしりと埋めるほどの量にいたる。日記をつけるかどうかは、自分の感受性が働くかどうかにかかっているとしたうえで、日常とバックパッキングしている状態の差異を次のように語る。

社会人は、ある意味ルーチンの繰り返しで、感じるがあってもそれを綴る暇もなく1日が終わってしまうから。本当は、毎日フラットとでかけて、なんかを感じて、ヌボーって考えたりしたいけど。旅に出た時は、制限なくなるから。時間的な制限とか。1日24時間どう使おうが、一食抜こうがいっぱい食べようが、歩こうが、自由に使えるから、行きたいところに行けるし、そこで思うがままに感じられる。あとは、人間関係のしがらみも全くないし、気持ちが自由になるやん。(Aさん⁽¹⁵⁾)

Aさんは、「毎日フラットとでかけて、なんかを感じて、ヌボーって考えたり」することができないルーチンな日常と比較して、旅が「自由」だからこそ、日常では働かない感受性が働いて日記をつけるのだという。つまり、「自由」を測る尺度は「不自由」な日常生活との差異にある。バックパッカーは自らが送る日常生活を「不自由」と想定し、日常生活にしばられていない状態にあることを「自由」と表現するのである。そして、彼らはこの「自由」を自らのバックパッキング経験に見出すことで「旅」の実感を得ている。

3. 「自由」による「旅」と「旅行」の認識

(1) パッケージツアーとバックパッキングにおける「自由」

バックパッカーは日常にしばられていない状態を「自由」と表現し、そこに「旅」ならではの魅力を感じている。しかし、日常生活からの離脱という観点では、パッケージツアーもまた非日常の経験として捉えることができる。特にフルパッケージツアーに見られる、日本での日常性を喚起させるような団体行動等の制約を受けないスケルトンツアーに関しては、バックパッキングとの差異はほとんどないように思われる。これに関し、Dさんはバックパッキングとスケルトンツアーの違いを以下のように説明している。

スケルトンツアーは非日常を楽しんでるけど、バックパッカーは旅行が日常で、常に移動しているイメージがある。スケルトンツアーの旅行者の日常はあくまで日本にあると思う。(Dさん⁽⁷⁾)

ここでは、パッケージツアーとバックパッキングでは日常のある場所が違うのだとされている。しかしながら、「自由」が日常にしばられていない状態であるとする、バックパッカーもまた比較対象としての「不自由」な日常は日本にあると考えられる。一方でAさんは、バックパッカーの日常と非日常について「バックパッキングしている時は毎日が非日常」とであると語った。つまり、パッケージツアーは非日常の経験を、日本の日常生活の中にあるレジャーとして楽しんでいるのに対し、バックパッカーは日本の日常生活から離脱し、毎日が非日常という特殊な状況のもとに身を置いていると捉えられている。Dさんの述べる「旅行が日常」という表現は、この毎日が非日常という特殊な状況をさしていると言える。

それではスケルトンツアーが日常性を排除しきれていない要因はどこにいたるのだろうか。日本人の海外旅行のあり方の変化について、メディアの観点から調査する山口は、スケルトンツアーは「買い・食い」行動といったお金を介する消費行動にその目的があり、スケルトンツアーと連動するガイドブックの内容もまたこれらの消費情報に紙幅が割かれ、旅先の歴史や文化を紹介するページは切り捨てられていると述べる[山口 2010:219]。この状況の中で、スケルトンツアーは「旅先の日常生活が伝えてきた歴史や文化から切り離され、お金を介した消費行動だけで辛うじて接点を持つ、

『個人旅行』が『孤人旅行』と化した、脱文脈化する海外旅行」[山口 2010:221]として発展してきたとされる。こうした「買い・食い」といった消費行動は、日本では一般に余暇の楽しみ方として捉えられる行為であり、あくまでも日常生活の中で形成された価値観における、非日常の楽しみ方である。つまり、非日常を楽しんでいると感じる自己の意識や価値観は常に日常の中にある。こうした消費行動に主眼が置かれる点においてスケルトンツアーは日常性を排除しきれていないのである。短期・滞在型においては、制約が少ないとされるスケルトンツアーの日常がなお日本にあると捉えられるのは、メディアを介して提示されるスケルトンツアーの目的と、それに従う自らの行動に日本での日常性を感じるからであり、この点においてスケルトンツアーは「自由」ではないのである。

しかし、ここで疑問点として残るのは、バックパッキングはスケルトンツアーに見られるような日本での日常性を感じないのかどうかという問題である。バックパッキングの大衆化の中で、バックパッキングは目的、期間、予算、ルート等において様々なタイプのバックパッカーを生んでいる。多くのバックパッカーが集まるタイ・バンコクのカオサン通りとそこを訪れるバックパッカーの生態について分析する新井は、「旅のスタイルは多様化し、カオサンを訪れる旅行者を一言で語ることももはや不可能」[新井 2000:214]とした上で、その一タイプとして「宿はカオサン、でも旅スタイルはバック・ツアー」[新井 2000:202]のバックパッカーの存在を挙げている。彼らの行動パターンは、名所観光、ショッピング、著名なレストランでの食事であり、期間は極めて短期、実質としてパッケージツアーと同様の消費行動をしている。それでも敢えてバックパッキングを選択する理由は「旅が自由にできるから」という点にあるという[新井 2000:203]。スケルトンツアーにおいて日常性を感じさせる要素として働くと考えられる消費行動をとりながらも、彼らは自らのバックパッキングに「自由」を見出しているのである。

ここからも分かるように、日常生活からの離脱、日常性の排除の度合いという観点では、バックパッキングとパッケージツアーの間に見られるのは段階的な差異であり、時にはその差異は実質的にほとんど存在しない。このあいまいな差異の中で、バックパッカーは「自由」を見出しているのである。つまり「自由」であるかどうかの基準は、日常生活からの離脱や日常性の排除の度合いのみで測られるものではないと考えられる。

(2)「自由」の身体化

この「自由」であるかどうかの基準について分析するにあたって注目したいのが、「バックパッキングをしてみたかった」という理由でこのスタイルを選択するバックパッカーが多く存在する点である。

今年で大学最後だし、バックパッカーやってみたいていうのと、一人旅がかっこいいという憧れがあつて。周りにもバックパッカーやっていた人がいて、話をきくと面白そうだから興味もって、来てみようって思った。ただ、何のために行けばいいかは今探しているところで、目的はない。何か見つかるかなと思って。(Pさん⁽⁹⁾)

Pさんにとって、この旅の目的は、憧れていたバックパッキングをすること自体であった。Pさんは3年前にフルパッケージツアーでバンコクに訪れ、4～5日間滞在した経験を持つ。筆者がインタビューをした時は2度目のバンコク訪問であり、滞在期間は1週間で、移動の時間を除くと、前回と同様に正味5日間の滞在であった。しかしPさんにとって今回の旅は前回とは違う旅であり、バックパッキングすることによって得られる「何か」を見つけに来たのである。

Dさんもまたバックパッキングに憧れ、バックパッキングすることを決めた一人である。彼女は、沢木耕太郎の『深夜特急』を読み、バックパッキングに強い憧れをもった。その憧れの理由を振り返って、Dさんは次のように語った。

バックパッキングすることがすごいことなんだという思いはあった。当時は、まっとうなレールからそれているってところに憧れてた。自分の道を歩む的な。一時的な逃避だという認識はなかったかな。だからツアーはそもそも選択肢になくて。場所は割とどこでもよかった。(Dさん⁽⁷⁾)

バックパッキングするということは、「自分の道を歩む」ことであり、場所はどこであれ、その行為自体に憧れや意味を見出していたのである。

PさんやDさんがこの憧れを持つこととなったきっかけは、バックパッキング経験者の語りである。この語りとは、彼らがその経験から語るバックパッキングの魅力、

すなわち「自由」であることであった。バックパッキングの大衆化の中で、多くのバックパッカーがこの「自由」を語ることで、「自由」とはバックパッキングというスタイルを模範とすることで得られるものとして認識されたのである。Pさんが、同じ期間・場所で行うパッケージツアーとバックパッキングを差別化し、今回あえてバックパッキングを選択したのは、バックパッキングというスタイルの模倣によって得られる「自由」に憧れを抱いたためである。

バックパッキングすること、すなわち「自由」であるという認識は、自分が「自由」な状態にあるかどうかを判別する基準として機能している。つまり、自分が日常生活にしばられない「自由」な状態にいるかどうかの基準は、自分がバックパッカー「らしい」かどうかにある。Pさんはバックパッキングをするにあたり、『地球の歩き方』や『最新版 バックパッカー読本』[旅行情報研究会+『格安航空券ガイド』編集部 2010]といったバックパッカー向けのガイドブックを参考にしたという。そしてタイにやってきて、これらの本に書いてある情報を頼りに一人で歩き回り、街の中心部での渋滞などを経験して、「本に書いてある通りだ」と納得し、その経験が「ロールプレイングをしているようで楽しい」と語った。つまり、バックパッカー向けの本に書いてある情報を自分の目で確認し、同様の経験をすることが、Pさんにとってバックパッキングならではの魅力、すなわち「自由」として捉えられているのである。

バックパッカーは、このようなバックパッカーらしい経験をする、また儉約、バックパッカーらしい服装や荷物、長期にわたる旅行行程といった特徴を模倣すること、より不確実な状態を求め、賛美するといったバックパッカーらしい行動や言動をとることで、「自由」を身体化する。そして、それによって日常生活にしばられていない「自由」な自己を再帰的に確認しているのである。

(3)「自由」の役割

この「自由」の身体化によって、「自由」は「旅」と「旅行」を明確に分ける境界線としての役割を果たすようになる。日常生活からの離脱という意味で使われる「自由」においては、段階的であいまいであったバックパッキングとパッケージツアーの差異は、「自由」の身体化によって、バックパッキングが「自由」な「旅」であり、バックパッキングではないパッケージツアーは「不自由」な「旅行」としてはっきりと区分されるのである。この区分化によって、「旅」であるバックパッキングと「旅行」

であるパッケージツアーは、目的によって使い分けられる別次元の旅行形態として認識される。

上海はスケルトンツアーで行った。一緒に行く人たちがいいホテルにゆっくりしたいってタイプの人たちだったからフリープラン選んで。そもそも目的が、友達と旅行することで、皆と行くことが目的だったし。パッケージツアーもバックパッキングもどっちも楽しいと思うよ。目的が違う。今回の目的は、バックパッキングをやることにあって、ここに行きたいとかよりも強かったからバックパッキング選んだけど。今後も目的によってパッケージツアーとバックパッキングはどっちも使うと思う。(Nさん⁽¹⁶⁾)

中谷はかつて「旅」と「旅行」について、「“旅”は想像力の分野に、“旅行”は行為の分野に、各々きっちり納まっている」[中谷 1973:38]状態であったと述べた。上記の語りは、「旅」と「旅行」双方が行為の分野における選択肢として語られている。バックパッキング文化の大衆化がもたらした「旅行」化によって、バックパッキングは憧れでしかなかった想像の分野から行為の分野に移行したのである。しかし同時に、大衆化に伴って生まれた多くのバックパッカーの語りが、「自由」の身体化による新たな「旅」の認識のあり方を生んだ。「旅」とは「自由」であり、「自由」とはバックパッキングすることによって得られる。つまり「旅」することとバックパッキングすることは同義であるという認識である。だからこそバックパッキングは「旅行」化によって行為の分野に移行しても、「旅」として「旅行」とは区別されるのである。

このように、身体化された「自由」こそが「旅」と「旅行」を区別するツールであり、バックパッカーはこの身体化された「自由」を手にするすることで、自らのバックパッキング経験が「旅」である実感を得るのである。

第4章 結論

日本の観光文化およびバックパッキング文化の大衆化は、パッケージツアーとバックパッキングの関係に二重性を与えた。自由裁量性、日常生活からの離脱という側面において、大衆化はパッケージツアーとバックパッキングの差異を縮小させ、両者を確実に近づけつつあるが、一方で「旅」と「旅行」の差異を明確にした。この二重性をもたらす身体化された「自由」は、現代の日本人バックパッカーのアイデンティティのあり方にも大きな影響を与えている。

アイデンティティとは存在の自己証明であり、「ある特定の場（国家、文化、ジェンダー、人種、民族、階級、性志向、その他）への執着から形成される」[カレン 2003:60]のものであるとすれば、日本で生活を送る日本人にとってそのアイデンティティは日本での日常という場において形成されるものである。この日常への執着を捨て、もともと自己のアイデンティティを凍結した状態がバックパッカーの語る「自由」である。

「自由」の身体化によって、バックパッカーはこの「自由」な私、すなわち今までの私ではない私を、バックパッカーらしい振る舞いをとることで確認できるようになった。つまりバックパッカーにとって、この身体化された「自由」こそが、今までの私ではない私を証明する新たなアイデンティティとして機能しているのである。バックパッキングが自分探しの手段とされ、多くの若者がこれを旅の目的するのは[新井 2000:77]、既存のアイデンティティとは違う新たなアイデンティティを、バックパッキングという旅行形態とその特徴を模範とすることで、手軽に獲得することができるからである。

このように新たなアイデンティティを獲得することによって、バックパッカーは既存のアイデンティティを相対化し客体視することが可能となった。「自由」である今の状態と「不自由」な日常は対比され、その差異が「旅」ならではの魅力として語られるのである。それと同時に、バックパッキングは既存の価値観を再確認し、それを再肯定していく装置としても機能する[大野 2011:167]。価値観をアイデンティティを形成する大きな要素だと捉えると、新たなアイデンティティの獲得は、既存のアイデンティティの再肯定につながるといえる。バックパッカーによって語られるバックパッキングの魅力の中に、次のような発言があった。

苦勞があるからやりがいがあるし、当たり前がないからこそ楽しい。普段ぬるま湯につかっているところから、冒険的要素、不確定な要素、不安とか緊張が味わえる旅に出ると、リアルな感じがして。今、この瞬間っていうのを楽しめるんだよね。(Eさん⁽¹⁷⁾)

バックパッキングによって得られる「自由」は、日常の自己のアイデンティティを一時的に凍結して得られているに過ぎない。Eさんがいう「リアルな感じ」とは、自己のアイデンティティが形成された日常という場の再認識と、その日常の中で自分は生きているのだ、という実感である。つまり、既存のアイデンティティを凍結することによって得られる「自由」は、結果として既存のアイデンティティの再確認につながっているのである。

本来、「自由」な状態というのは、既存のアイデンティティの否定によってなされるはずである。しかしバックパッキングがもたらす帰結が既存のアイデンティティの否定につながらないのは、それがあくまでも既存のアイデンティティの一時的な凍結であって放棄ではないからである。古くから日本人の憧れとして存在し続けた「旅」という言葉が、「自由」の身体化によってバックパッキングと同義化されることで、バックパッキングは既存のアイデンティティを形成する価値観において、「憧れの」、「価値ある」行為として捉えられるようになった。長期休暇が認められることが少ない日本社会において、日常生活で与えられる役割や責任を放棄して長期間放浪することは「すべきではない」行為として捉えられるが、バックパッキングをするのであれば話は別になる。「旅」という言葉がバックパッキングに意味をあたえ、その行為を正当化している。つまり、既存のアイデンティティを形成する価値観自体がそれを凍結することに価値を見出しているのである。これによって、一見相容れないように見える「自由」な状態と既存のアイデンティティは両立し、既存のアイデンティティを否定することなく、「自由」な状態を得ることができる。

現代日本人バックパッカーは、こうして既存のアイデンティティを片手にもったままに、「自由」という新たなアイデンティティを獲得する。彼らは常にこの2つを見比べながら旅を続ける。そしてこの2つの間の差異にバックパッキングならではの魅力を見出しているのである。この比較は、対象となる既存のアイデンティティを形成する周囲の環境、治安、人間関係、食べるもの、価値観などあらゆる分野に及ぶ。バ

バックパッカーが語る「自由」が多様な意味を含む理由は、これらの比較によって発見された差異が全て「自由」というアイデンティティをもつ自己のもとで発見されたものだからである。これらの差異は、最終的に既存のアイデンティティの実感という形で既存のアイデンティティの中へ包括されていく。筆者がインタビューをしたSさんは、「別に日常が嫌いなわけではないけれど、違うことをすると生きてるなって気持ちになれるから」と語った。彼女のように、現代日本人バックパッカーは、バックパッキングによって既存のアイデンティティを再確認することで、生きているという実感を得ているのである。

注

- (1)A さん：20 代男性。会社勤務。大学在学中に 1 年間休学し、2003 年～2004 年にかけて 11 ヶ月間のバックパッキングを経験。東南アジアから、ヨーロッパにかけてユーラシア大陸を陸路で横断。2011 年 7 月、日本・茨城にてインタビュー。
- (2)J さん：20 代女性。会社を辞職して旅に出た。ツアーでは何度か海外に出たことはあるが、バックパッキングをするのは初めて。調査時点で 3 週間目。陸路で西へ向かい、1 年間で世界を一周するつもり。2011 年 8 月、タイ・バンコクにてインタビュー。
- (3)M さん：40 代男性。会社勤務。会社の長期休みの旅にバックパッキングに出かけている。1 年に何回も出かけており、合計すると 20 回は超えている。インタビュー時のバックパッキングは 11 日間の旅程。タイとカンボジアに行く予定である。2011 年 8 月、タイ・バンコクにてインタビュー。
- (4)R さん：20 代男性。会社勤務。バックパッキングは 2 回目。1 回目はヨーロッパを 1 ヶ月間回った。インタビュー時のバックパッキングは 1 週間の旅程で、タイのバンコク、アユタヤ、カンチャナブ리를回る予定。2011 年 8 月、タイ・バンコクにてインタビュー。
- (5)Q さん：20 代男性。会社勤務。バックパッキングは 4 回目。会社勤めを始めてから、友人に連れられてバックパッキングを始めた。一人旅はインタビュー時のバックパッキングで 2 回目。6 日間の旅程で、タイとミャンマーを回る予定。2011 年 8 月、タイ・バンコクにてインタビュー。
- (6)B さん：20 代男性。会社勤務。大学在学中に 1 年間休学、2006 年～2007 年にかけて 8 ヶ月間のバックパッキングを経験。東南アジアからヨーロッパへのユーラシア大陸を陸路で横断後、飛行機で東南アジアに戻ってから日本に帰国。出発にあたり、A さん⁽¹⁾にアドバイスなどをもらう。2011 年 7 月、日本・東京にてインタビュー。
- (7)D さん：20 代女性。大学生。1 年間の留学経験後、帰国前に 2010 年 3 月～4 月にかけて 1 か月間バックパッキングを経験。東南アジアを回る。2011 年 9 月、日本・茨城にてインタビュー。
- (8)H さん：20 代女性。大学生。大学を 1 年間休学し、2010 年 3 月～7 月の 5 ヶ月間

バックパッキングを経験。スタートからゴールまでを通して友人と二人旅。世界一周航空券を駆使しながらヨーロッパ、南米、オーストラリア、東南アジアを回る。旅にあたってはEさん⁽¹⁷⁾のアドバイスなどを受ける。2011年10月、日本・茨城にてインタビュー。

- (9)Pさん：20代男性。大学院生。バックパッキングは初めて。インタビュー時のバックパッキングの滞在期間は1週間の予定で、調査時点では2日目。バンコク1か所だけでは物足りないのもう一か所行こうと考えていた。1日目にシングルルームに宿泊し、寂しかったことと、情報を求めて日本人宿に宿を変えた。2011年8月、タイ・バンコクにてインタビュー。
- (10)Fさん：20代女性。会社勤務。大学在学中に1年間の留学を経験。2008年～2009年の留学期間中及び、長期休暇にバックパッキングを実施。ヨーロッパ、南米など5回経験。2011年10月、日本・茨城にてインタビュー。
- (11)Gさん：20代男性。会社勤務。大学在学中、2011年春に最後の長期休暇を利用して19日間のバックパッキングを経験。バングラデシュとインドを回る。2011年10月、日本・茨城にてインタビュー。
- (12)Oさん：20代男性。日本での生活に関しては未回答。日本人宿に長期で宿泊。タイには、のんびりするために何度も来ている。ヨーロッパにもバックパッキング経験がある。旅の期間などは未定。2011年8月、タイ・バンコクにてインタビュー。
- (13)Iさん：20代女性。大学生。2009年～2010年の1年間の留学経験を持つ。留学期間最後の1か月にヨーロッパにてバックパッキングを実施した他、南米、東アジアなど4回のバックパッキングを経験。2011年10月、日本・茨城にてインタビュー。
- (14)Sさん：20代女性。会社勤務。バックパッキングは6回目。大学時代は長期休暇の旅にバックパッキングをしていたが、社会人になってから来るのは初めて。それまでのバックパッキングの期間はまちまちで、短いと1～2週間、長い時は3カ月の時もあった。インタビュー時のバックパッキングの期間は5日間。タイ経由でラオスのビエンチャンに行く予定。2011年8月、タイ・バンコクにてインタビュー。
- (15)Cさん：20代男性。大学生。バイトして貯めたお金で、長期休暇の度にバックパッキングへ出かける。バックパッキングは、ヨーロッパ、東南アジア、中米など5回経験。高校時代に留学を経験し、英語は堪能。2011年9月、日本・山梨にてイン

タビュー。

(16)Nさん：20代男性。大学生。大学を半年間休学中、その最後の2カ月半でバックパッキングをすることを決め、東南アジア、東アジアをまわり、飛行機を使わずに帰る予定。調査時点で1か月。バックパッキングは初めて。2011年8月、タイ・バンコクにてインタビュー。

(17)Eさん：20代男性。大学生。大学を1年間休学し、2009年～2010年にかけて10ヶ月間のバックパッキングを経験。世界一周航空券による航空券を駆使した世界一周に挑戦。アジア、ヨーロッパ、南米、アメリカを回り日本に帰国。2011年9月、日本、茨城にてインタビュー。

参考文献

AB-ROAD

- 2011 「AB-ROAD 海外旅行調査 (Market Survey Of Overseas Travel) ~2010 年海外旅行者の選択プロセス、評価と今後の意向～」
http://www.ab-road.net/research_center/release/misc/pdf/20110722_02.pdf (2011/11/25 参照)。

赤坂和雄・手塚兼輔

- 1995 「日本人の海外旅行と外国語」『リベラルアーツ：札幌大学教養部教育研究』12:214-232。

新井克弥

- 2000 『バックパッカーズ・タウン カオサン探索』双葉社。
2001 「メディア消費化する海外旅行～バックパッキングという非日常」嶋根克巳・藤村正之編『非日常を生み出す文化装置』pp.111-137、北樹出版。

Frommer,A.

- 2007 *Europe on 5 Dollars a Day* (Reproduction of Original Printing).Wiley.

長谷川教佐

- 1999a「現代日本の旅行文化—日本人と観光旅行（上）」『麗沢大学紀要』68:1-22。
1999b「現代日本の旅行文化—日本人と観光旅行（下）」『麗沢大学紀要』69:1-36。

今井誠則・山内義治

- 1999 『大衆観光の生態史—日本とイギリス—』溪水社。

カレン・カプラン著 村山淳彦訳

- 2003 『移動の時代—旅からディアスポラへ』未来社。

加藤秀俊

- 1968 「日本人と海外旅行—現代の文化接触—」『中央公論』83(10):325-333。

北川宗忠

- 1998 『観光と社会 ～ツーリズムへのみち～』サンライズ出版。
2008 『観光・旅行用語辞典』ミネルヴァ書房。

国土交通省観光庁

- 2010 「平成 21 年度の観光の状況」 <http://www.mlit.go.jp/hakusyo/kankou-hakusyo/h22/images/01.pdf> (2011/10/25 参照)。

旅行情報研究会+『格安航空券ガイド』編集部

- 2010 『最新版 バックパッカーズ読本』双葉社。

中谷健太郎

- 1973 「旅と日本人」『教育と医学』21(1):35-42。

小田実

- 1979 『何でも見てやろう』講談社。

大野哲也

- 2008 「商品化される「冒険」ーアジアにおける日本人バックパッカーの「自分探し」の旅という経験ー」『社会学評論』58(3):268-285。
2011 「アイデンティティの再肯定ーアジアを旅する日本人バックパッカーの「自分探し」の帰結ー」『関西学院大学社会学部紀要』(111):155-170。

斎藤聖二

- 2003 「バックパッカーになる」青柳まちこ編『文化交流学を拓く』pp.26-43、世界思想社。

佐々木土師二

- 2007 『観光旅行の心理学』北大路書房。

沢木耕太郎

- 1986 『深夜特急 第一便』新潮社。

白幡洋三郎

- 1990 「旅行業 ーもう一つの成長神話」『中央公論』105(1):446-452。

白幡洋三郎・加藤典洋・樺山紘一

- 1990 「旅行 ー列島感覚のテイク・オフ」『中央公論』105(1):453-466。

武中毅

- 2001 『バックパッカーになれない僕らへ』文芸社。

「地球の歩き方」編集室

- 2008 『地球の歩き方 D16 東南アジア 2008~2009 年版』ダイヤモンド・ビッグ社。

山口誠

2010 『ニッポンの海外旅行 一若者と観光メディアの50年史』ちくま新書。

山口さやか・山口誠

2009 『「地球の歩き方」の歩き方』新潮社。

山崎正和・小松左京

1972 「日本人は夫婦で旅できない」『文芸春秋』50(4):326-336

Summary

Identity of Japanese backpackers and "freedom"

In Japan, over sea travel which was privilege of limited people formerly, became famous leisure time activity, after 1964, the year of liberalization of over sea travel, with economic growth, developing of facilities for travel, and so on, which many people can choose where to go without reserve. Package tours; a traveling style in which travel agents arrange the schedule of travel, hotel, and so on for travelers, contribute to this development and many Japanese use it when they travel. With the popularization of over sea travel and change in the needs for it, package tours change its style. At first, the mainstream of it had been full-package-tour; the tour that all schedules are arranged by travel agents, but now it has changed to skeleton-tour; the tour in which only Hotels and planes are arranged, because there was a demand for more free time.

But then, some people didn't choose these package tours. They traveled overseas by backpacking; a traveling style in which the travelers arrange all of the travel on themselves own. They are called "backpackers". Most of them have characteristics of long term traveling, casual style and act of saving money. The adventurous image of backpacking reminded Japanese of "*tabi*"; the word which means journey. Since Japanese has longed for "*tabi*" traditionally, backpacking became popular among Japanese, especially among young. Because of this popularity, many goods and service for backpackers has been made and we become able to enjoy backpacking easier and safer. Package tour and backpacking can be said to be similar in a certain sense.

However, backpackers distinguish backpacking as "*tabi*" from package tour clearly. And the reason they claim is that backpacking is "freedom". This "freedom" has many meaning and it works as a factor in backpackers' realization of backpacking as "*tabi*", since they take "freedom" as attraction which only "*tabi*" hold. "Freedom" can be classified into 4 types. First, it means that they can

arrange schedules themselves, so that they can realize their will and growth. Secondly, uncertain situation gives them valuable experience as risk or unexpected event they can't experience in their daily life. Thirdly, they can express their sensibility and feeling as it is. Finally, the bond of human relations pass away and they can have a lot of casual meeting. These "freedom" are always compared to daily life, so it means the state of difference from daily life.

Because many backpackers' talking makes the image that backpacking is "freedom", the characteristic of backpacking and behaviors like backpacker become a symbol of "freedom". Backpackers confirm their "freedom" by imitation of backpacking style. So they can distinguish backpacking as "*tabi*" from package tour clearly even if their course is the same as package tour.

That is to say the identity of modern Japanese backpackers is "freedom". They freeze their identity of daily life with getting the new identity. And they confirm the existence of their daily-life-identity by watching it objectively. Japanese backpackers confirm their existence in daily life from backpacking.

謝辞

本論文を作成するにあたり、丁寧かつ熱心なご指導をいただきました関根久雄教授に深謝いたします。また、タイ・カオサン通りでの偶然の出会いにも拘わらず、快く面会くださった関東学院大学文学部 新井克弥教授には、多くの知識と示唆を頂きました。ここに感謝いたします。

日常の議論を通じて多くのコメントをくださり切磋琢磨しながら共に頑張った、関根ゼミ生の皆さま、大学卒業まで支えてくださった両親、多くの激励をくれた友人たちの存在は執筆にあたり非常に大きな支えとなりました。ありがとうございました。

そして、長時間に及ぶインタビューを快く引き受けて下さったバックパッカーの皆さまには感謝の念にたえません。協力していただいた全ての皆様へ心から感謝の気持ちとお礼を申し上げたく、謝辞にかえさせていただきます。